報告

産業保健・看護学における職場巡視の学習到達目標達成のための教授方法の工夫

藤井智恵子[1)]、多田敏子[1)]、松下恭子[2)]、森脇智秋[1)]、岡久玲子[1)]
1）徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部地域看護学
2）徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部メンタルヘルス支援学

（キーワード：産業保健・看護学、職場巡視、学習目標、教授方法）

Study on the teaching development for attainment of a study target of the place-of-work inspection in industrial health and nursing

Chieko Fujii[1)],Toshiko Tada[1)],Yasuko Matsushita[2)],Chiaki Moriwaki[1)],Reiko Okahisa[1)]
1）Department of Community Nursing, Major in Nursing, Institute of Health Biosciences, The University of Tokushima
2）Department of Mental Support Nursing, Major in Nursing, Institute of Health Biosciences, The University of Tokushima

（Keywords : industrial health and nursing, place-of-work inspection, study target, teaching method）

１．はじめに

大学教育において資格の取得が求められる領域では、専門科目の習得には目指す資格に必要な実践力の獲得が重要課題である。看護職の教育では、大学の卒業要件を満たすとともに保健師助産師看護師法による国家試験の合格をもって修学の目標が達成できたと考えられる。社会の医療に対するニーズの変遷と共に看護職には質の高い実践力が求められている。近年、看護師国家試験受験資格と保健師国家試験受験資格の両方を付与する内容を統合的に教育する看護系大学が急増している。特に、地域看護学実習の実習場の確保困難などの問題を抱える保健師国家試験受験資格に関連する領域では課題が山積しており、卒業時の保健師の能力水準が問われている。そういった中でさらに産業看護学領域については履修時間確保が困難な状況にある。しかし、産業看護の分野は、職業生活を健康で過ごし、健康な老後を迎えることにつながる重要なケアの領域である。産業の現場では、メンタルヘルスの問題や自殺の問題、労働災害の問題など課題がある。これに対して、快適職場づくりやメンタルヘルス対策が国の施策となっており、保健師は産業の場でそれらを担う役割があり、重点をおいた活動が行われている。

本学では、産業看護の領域を３年次前期に科目名「産業保健・看護学」の講義１単位（15 コマ）として指導している。主に講義形式で授業を行っているが、実際に就業経験のない学生に対して授業内容を理解させるために、学内を働く場と見立てて講義を行っている。そのなかで、一つの単元である職場巡視の視点や方法を習得させるために大学構内を職場と仮定して、職場巡視を学生に体験させたところ、安全・衛生・快適さに注目し、多面的かつ詳細に分析しており、産業看護の学習目標到達に有用と考えられたのでその取り組みを報告する。

２．シラバスの紹介

授業目的等は下記に示した。また、表１に授業計画を示した。

(1)授業目的：産業の場における人々の心身の健康問題を取り上げ、産業保健活動の基本的な知識および技術を習得する。

(2)授業概要：労働者の労働衛生、メンタルヘルスケア、健康の保持増進のための保健指導、健康相談等、産業保健や産業看護の理論、役割、機能について教授する。

表１　授業計画

回数	授業内容	ねらい
1	授業説明	産業保健・看護論を知る
2	・産業保健・看護の理念と目的 産業保健・看護の定義、産業看護職の役割機能、産業看護職に求められる能力と役割を果たすための心構え	産業保健･看護の理念と目的を理解する
3	・産業保健・看護の歴史と現状 産業保健の歴史、産業構造と職業構造の変遷 産業看護活動の現状	産業保健･看護の歴史と現状を理解する
4	・産業保健・看護の制度とシステム 労働安全衛生に関する法体系、労働衛生管理の基本。産業保健組織と人材、産業保健・看護と社会資源	産業保健･看護の制度とシステムを理解する
5	・産業保健・看護における健康課題 健康管理、健康診断と実施後の措置	産業保健･看護における健康課題を理解する
6	・産業保健・看護における健康課題 職場におけるメンタルヘルス対策	産業保健･看護における健康課題を理解する
7	・産業保健・看護における健康課題 過重労働による健康障害防止対策	産業保健･看護における健康課題を理解する
8	・産業保健・看護における健康課題 職業性疾病防止対策	産業保健･看護における健康課題を理解する
9	・産業保健・看護における健康課題 作業環境の評価に基づく作業環境管理	産業保健･看護における健康課題を理解する
10	・産業保健・看護の展開 産業看護職の職務、産業保健計画と評価 個別的・集団的・組織的展開方法 地域保健との連携	産業保健・看護の展開を理解する
11	・産業保健・看護の展開 安全管理	産業保健・看護の展開を理解する
12	・産業保健・看護の展開 職場巡視	産業保健・看護の展開を理解する
13	・産業保健・看護の展開 労働安全衛生ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄｼｽﾃﾑ	産業保健・看護の展開を理解する
14	・産業保健・看護の展開 快適な職場環境の形成	産業保健・看護の展開を理解する
15	定期試験	

(3) キーワード:労働者､労働衛生管理体制の確立、作業環境管理、作業管理、健康管理、労働衛生教育、安全管理
(4) 先行科目:地域看護学概論
(5) 到達目標:産業保健における健康問題とその対策を理解する。
(6) 成績評価：定期試験を行う。
(7) 教科書：標準保健師講座３
(8) 参考書：国民衛生の動向、労働衛生のしおり

３．職場巡視に関する講義内容

職場巡視の意義、事前準備、作業者の観察、職場巡視結果の記録について講義した。また、パワーポイントの写真を用いて、良い工夫ができている点と改善を検討する点について提示した。なお、職場巡視の目的は、安全と健康の確保と快適な作業環境・作業条件づくりを支援するために必要な職場の情報を入手することであると解説した[(1)(2)]。以下のパワーポイントは、職場巡視に関する講義に用いた講義資料である。最初に、職場巡視の意義を説明し、続いて効果的な職場巡視を行うための事前準備を追って解説した。ここでは、巡視を

行う者の準備、巡視先の状況把握のための事前調査や、巡視先への連絡、および観察ポイントを含めた。職場巡視の例にはイメージアップを図るために写真を用いて説明した。

職場巡視の意義

・目的：安全と健康の確保と快適な作業環境・作業条件づくりを支援するために必要な職場の情報を入手する

↓

・事務室や作業場、食堂・休憩室・更衣室・手洗い所などの保健施設を回り、作業環境や作業条件を把握する

＊目、耳、鼻などの五感でとらえる

事前準備

1.既存の職場の情報を知る
- ・製造工程、原材料、業務のプロセスなど
- ・設備・機械の定期点検など
- ・健康診断結果、休務統計など
- ・作業環境測定結果など
- ・事故発生状況など

事前準備

2.現場への連絡

3. 巡視時の服装
作業服、ヘルメット、安全靴、保護具など

4.心構え
「現場のことは現場に聞く」

作業者の観察

- 作業姿勢
- 作業方法
- 健康状態など

職場巡視の例

ねらい：職場巡視の意義を理解するとともに職場巡視の実際について学ぶ

良い工夫点

１） ５Sが徹底できている

２） 作業者に風が直接当たらないよう透明なカバーが装着されていた。

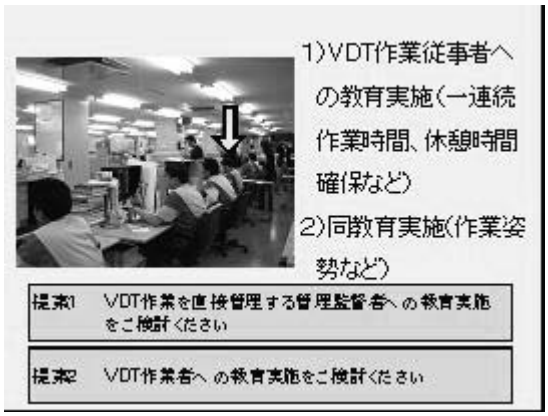
３） グレア防止のため、モニターフードをつけていた

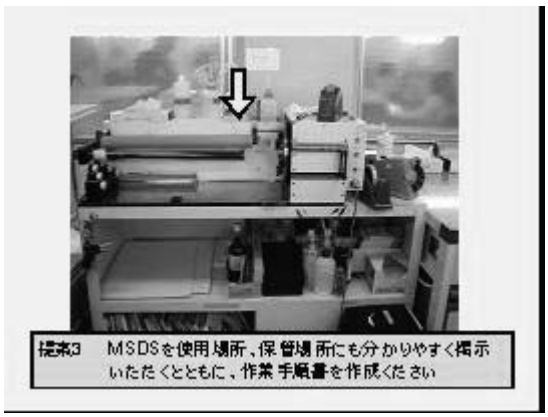
改善を検討する点

1）一人作業である

2）一部に不良作業姿勢

3）化学物質管理状況





４．方法

(1) 対象者：看護系大学の３年生 81 名である。

(2) 巡視の実際：巡視場所は、大学構内を職場と仮定して７か所に分け、巡視場所は学生に自由に選択させた。巡視は、１人～３人で行うよう指示した。巡視時間は、15 分間で行うこととした。記録用紙には、巡視のポイントを 11 項目指示した。

(3) データ収集方法:課題レポートを研究データとした。

(4) 分析方法：課題レポートの内容分類を KJ 法によって行った。

(5) 倫理的配慮:レポートを研究データとするにあたって学生に研究目的、成績の評価とは無関係であること、許諾は自由意志であることを説明し、同意を得た。

５．結果

結果は安全、衛生、快適さにまとめることができた（表２～表４）。

それぞれの項目で、良いと感じるところや問題と感じるところに注目して各項目を挙げていた。安全面では街灯や道路の状態、消火器、通路のマットなど多方面にわたる項目が挙げられていた。

衛生面や快適さについても、屋内だけでなく、屋外の植え込みにも目を向けていた。不必要な明かりを消すことが快適さの良い点として挙げられていた。

表 2 安全面について

	項目
良いと感じたところ	・非常口・防火扉周辺に物はなく、すぐに使える状態だった。
	・実験室前に緊急シャワーがあり、消火器も設置されていた。
	・廊下と渡り廊下の段差解消のため、スロープがつけられていた。
	・会館前の道路が広く、見通しが良い。
	・外灯は、こまめにあった。
問題と感じたところ	・廊下に消火器が合計 13 本あり、1カ所に3本かたまって置いてあった。
	・非常口を示すプレートの位置が目につきにくいくらい下にあった。
	・トイレに敷いているマットにヒールがはさまるおそれがある。
	・緊急シャワーのチェーンが廊下の歩行時に引っかかり易いので、壁に沿わした方が良い。
	・中庭の駐輪場は、自転車が整頓されておらず、歩道スペースが確保されていなかった。

表 3 衛生面について

良いと感じたところ	・B 棟のトイレは、明るく清潔感があった。
	・廊下にゴミ箱はなく、ゴミ箱が保健学科棟一ヶ所にまとめられており、衛生管理ができている。
	・AED が設置されており、その場所が明示されている。
	・A 棟のトイレは、換気扇は自動になっていて清潔で匂いがなかった。
	・校舎の周りに異臭のする場所はなかった。
問題と感じたところ	・コピー室の中は段ボールが置かれていて整理整頓がされていない。
	・廊下は全体的に照明が暗かった。
	・廊下に置いている冷蔵庫の上に、埃がたまっており、半年以上も経つペットボトルも置いている。
	・中庭にゴミや落ち葉が落ちていて、黒く汚れた室外機が並んでいて不衛生であった。

表 4 快適さについて

良いと感じたところ	・照明は節電のため、ほとんど消されていた。
	・窓から外が眺められるし、光がたくさん入ってくるので、すがすがしい。
	・網を付けて鳩防止をしている。
	・必要のない電気はちゃんと切られていた。
	・トイレの電気はセンサーが付いていた。
	・校舎の周りに自然が多く、机やいすなど休める場があった。
	・植込みの手入れが行き届いていた。
問題と感じたところ	・ドアが固くて開きにくい。
	・節電のため昼間でも薄暗かった。
	・壁が薄汚れているので、暗い感じを与える。

６．考察

今回の職場巡視の授業は、発見学習であった。発見学習は、学生が既習の知識を用いて、与えられた教材から概念や原理を発見していく学習である。その過程は、漸進的でなく数段階、飛躍するため、学生には非常に困難な授業形態とされている[(3)]。しかし、産業保健・看護学について学生自身が学ぶ学習環境を職場と見立てて職場巡視をするという体験を取り入れた授業を行うことにより、実務でも難しい職場巡視の内容[(1)(2)]が盛り込まれていたと考えられる。たとえば、職場の問題点だけを洗い出すのではなく、すでに改善されている点にも注目して問題を焦点化する視点がなければ、改善に結び付きにくいが、学生は良い点にも注目した項目を多数挙げていた。

坂田によると、学習者にとって非常に難しい内容をシミュレーションで教授しようとしても、学習者の不安や戸惑いを増長させてしまう可能性が高いが、教授内容とから生じるリスクと教授方法から生じるリスクを想定して双方のリスクを十分に考慮し、各々の場面で学習者がどのような反応をするかを事前に予想し、全体的なリスクを管理する方針を持っておくことが必要であると述べている[(4)]。授業の中で、産業の場を十分に理解できるようになっていれば、学生自身が学ぶ学習環境を職場と見立てることができるようになっていた

と考えられる。

保健師国家資格を取得すると、第一種衛生管理者免許を取得することができる。４年制大学で学ぶ看護学生にとっては、看護師、保健師のいずれの資格で就職したとしても、自らの職場環境を評価し、改善することができるリーダーシップが求められる。その際に、この学習の意義が発揮されるので、このような体験が重要であると考えられた。看護学のカリキュラムの中では１単位ではあるが、産業に特化しなくても環境に目を向けることは看護職として基本的な責務である。さらに人々の職業との関連でより良い環境を目指した取り組みができることは、快適な職場環境で仕事に従事するという生活の質（QOL）の向上に寄与することでもある。

今後の課題として、産業保健・看護学の教授方法として、職場巡視を活用した作業環境管理、作業管理についても演習を取り入れ、学生の産業看護の実践力を高めていきたいと考えている。限られた授業時間の中で、身近な教材や場面を活用してどのように取組んでいくかが課題である。

参考文献

(1) 青山英康, 小木和孝, 天明佳臣, 中桐伸五（監修）：職場改善のための安全衛生実践マニュアル, 労働科学研究所出版部, 1999.
(2) ILO・国際人間工学学会編, 小木和孝訳：人間工学チェックポイント, 労働科学研究所, 1998.
(3) 杉森みど里, 舟島なおみ：看護教育学, pp. 212−221, 医学書院, 2004.
(4) 坂田浩：学生の多様性に対応した授業設計とリスク管理, 大学教育研究ジャーナル第３号, pp. 10−19, 2006.